

ベンバの食用イモムシ採集

著者	杉山 祐子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1993-09
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008553



ベンバの

食用イモムシ採集

■ 杉山 祐子

1 ベンバの昆虫食

中南部アフリカ、ザンビア北部州に住むベンバ(Bemba)のおもな生業は、チテメネ(*citemene*)とよばれる独特な焼畑耕作と近年導入されたファーム(*faamu*)とよばれる半常畑耕作を中心とする農耕である。しかし、その食生活をみると野生動植物が非常に重要な位置を占めており、その中でも昆虫食はベンバの食生活を強く特徴づけるものであるといえよう。

ベンバが食用とする昆虫には、カミキリムシ(成虫、幼虫とも食用。未同定)、セミ(成虫のみ食用、主として子供の食用。未同定)、シロアリなどさまざまな種類があるが、季節的に集中し、しかも大量に摂取されるのは、食用コオロギ(*Nyense : Gymnogyllu sp.*)と食用イモムシ(フィシム:*Fishimu*)である。

食用コオロギは雨期の最盛期にあたる2月頃にシーズンを迎え、必要に応じて個々人で採集される。これに対して、ある種の食用イモムシは乾期から雨期への変わり目に集中的に発生し、その採集は、村のほとんどの世帯がイモムシが発生する

ブッシュに移住するなど大々的に執り行なわれることがある。

ベンバは食用イモムシをフィシムと総称する。フィシムには12種類あり、大きさ、外観、食草、発生時期、発生場所などさまざまである。しかし、人々がその採集に情熱を傾けるのは、チプミ(*Cipumi*)とムンパ(*Mumpa*)とよばれる2種の大型食用イモムシだけである。チプミ、ムンパともに乾期から雨期への移行期にあたる10月末から11月にかけての短期間に集中して発生する。また、年により大発生することもある。分布は地域的に偏っており、ムンパはおもに北部州州都のカサマ(*Kasama*)付近に、チプミは私たちのフィールドであるムピカ(*Mpika*)やチンサリ(*Chinsali*)付近に多い。本稿では、その採集活動を観察することのできたチプミについて述べることにしたい。

2 チプミの採集

チプミは、鮮やかな黄緑色の体をした刺も毛もないイモムシで、ムトンド(*Mutondo : Julbernardia paniculata*)を食草としている。チプミの採集方法

写真—内臓をとり除いたチプミの乾燥(筆者撮影)

には、樹高の低い木を折り曲げて枝先の葉についたイモムシを採集する方法(クオンガミカ・イミティ：*kuongamika imiti*〔木々を折り曲げる〕)、大木を根元から伐採して採集する方法(クテマ・イミティ：*kutema imiti*〔木々を伐採する〕)、および日中の熱い日差しを避けて地上に降り、穴の中に集まっているチプミを一網打尽に採集する方法(クコラムチリンディ：*kukola mucilindi*〔穴の中からイモムシを採る〕)の三つがあげられるが、このうち大木を伐採したり、穴に集まるチプミを採集したりするのは、チプミが大発生した当たり年に限られる。

当たり年とそうでない年とでは採集量に大きな違いがあり、当たり年でないときの採集量が1世帯あたり乾燥重量にして2, 3キログラム以下であるのに対し、当たり年には1世帯10キログラム以上の収穫がある。乾燥したチプミ1匹は約0.5グラムであるから、当たり年には1世帯あたり2万匹以上のチプミを採集していることになる。

チプミの採集地は大きく2種類に分けられる。ひとつは、放棄してから10年ほどたったチテメネ跡地(チフンブレ：*cifumbule*)である。この時期のチテメネ跡地にはチプミの食草であるムトンドが多く、しかもその樹高は低いので採集に都合がよい。ここはおもに日々のおかずのためのチプミがこまめに採集される場所で集落にも近い。当たり年でない年にはここでだけ採集活動がみられる。いまひとつの採集地は、フォレストリザーブなどムトンドの大木が生えているところで、集落からはかなりの距離がある。チプミの当たり年に限りここに移住して採集が行なわれる。

3 チプミのライフサイクル

第1表に、ベンバの人々が説明するチプミのライフサイクルを示した。10月半ば頃、雨期入りを

第1表 チプミのライフサイクル

時期	ベンバ名	ステージ	説明
初雨 (10月中旬)	ナムンパピラ (<i>Namumpapila</i>)	成虫(蛾) 〔産卵〕	雨を感じて出てくる ムトンドの葉裏
	アマニ (<i>Amani</i>)	卵〔ふ化〕	白いビーズ様
	チプミ (<i>Cipumi</i>)	幼虫	雨を飲んで育つ
11月	ムポーショロ (<i>Mposholo</i>)	サナギ 直前	動かず、葉 も食べない
	ムスングウェ スングウェ (<i>Musungwesungwe</i>)	サナギ	自分で土中にもぐり、サナギに

しらせる初めての雨が降ると、チプミはサナギからナムンパピラ(*Namumpapila*)とよばれる蛾の成虫に羽化する(ナムンパピラという語は食用イモムシ12種すべての成虫について用いられ、とくにチプミの成虫に言及するときにはチプミのナムンパピラ〔*Namumpapila wa Cipumi*〕という使い方をする)。

ナムンパピラは祖霊の化身であると言われ、これを捕まえたりいたずらしたりすると祖霊が怒り、その年のチプミは不作になるという。ブッシュに移住しての採集活動は祖霊信仰と深い関わりをもっており、採集にはさまざまな禁忌が課せられる。その年のチプミ採集は勝手に始めてはならない。その年最初のチプミが村長の命によって村の祖霊祠(ンフバ：*Mfuba*)に捧げられて初めて口開けとなる。

雨を感じて地上に出てくるというチプミのナムンパピラはブッシュの中をはたはたと飛び回ってムトンドの葉裏に白いビーズのような卵を生み付ける。卵から孵化したチプミは雨を飲んで育つと言われ、孵化してから1, 2週間で採集可能な大きさ(6センチメートルほど)になる。チプミの採集期はそれからチプミがサナギになって土中にもぐるまでの2, 3週間ほどである。

この間のおかずはほとんど毎食チプミである。

4 チプミ採集行

雨が降り始めると人々はナムンパピラを目撃したというニュースを心待ちにし、畑仕事の行き帰りには必ずムトンドの葉を裏返して卵の有無を確かめる。村の近くにチプミが多いことを知ると30キロメートルほど離れたフォレストリザーブにまで偵察に出かける男たちが現われる。この偵察行でチプミが大発生していることが確かめられると人々は急に落ち着きをなくし、女たちは必死でブッシュでの主食となるシコクビエなどの製粉作業に取りかかる。ブッシュで暮らすのに充分な量の粉が準備できるのを待ちかねては、この粉と鍋、採集用の斧とバケツなどをもって次々とブッシュに移住していく。

フォレストリザーブに向かう道は昼夜を問わずあちこちの町や村からチプミ採集に移住する人々が行き交い、人々を運ぶ車が頻繁に往来する。村には採集に役立たない小さな子供たちとその世話を任された老人たち、ニワトリと犬だけが残り、すっかり閑散とした趣になる。一方、ブッシュは、遠くは70キロも歩いてきたという人々を含め、さまざまな村や町から集まった人々の仮小屋が建ち並び大賑わいを見せる。

人々が移住したブッシュでは、朝5時ころから採集活動が始まる。低い木は折り曲げ、高い木は伐採して、まるで競争のようにイモムシ採集は進む。もっている容器が採集したチプミで一杯になると、木陰に座って内臓を出してかさを減らし、さらに夕刻になるまで採集を続ける。夕刻になると野営地に戻り、おきの上に内臓を出したイモムシを広げて乾燥させ持参した麻袋につめて保管する。この作業は村から持参した主食用の粉がなくなるまで、1週間から10日以上も毎日続けられる。

5 ブッシュに町がやってくる

肉よりもはるかにおいしいと評価の高いチプミは副食として重要なだけでなく、高い値段で売れるという利点も合わせもっている。チプミの当たり年には採集する人々とともに商人たちがブッシュにやってきて、鋤などの農具、衣類、靴、塩、砂糖、ビール、コーラ、菓子、パンなどの店を開く。人々は乾燥したばかりのチプミをこれらの品々と交換し、チプミをおかずにした食事のあいまには、普段、村では口に入ることのないビールやコーラ、菓子、パンなどをたらふく食べるのだという。より多くチプミを採ればそれだけ多く贅沢なものを食べ、新しい農具や衣類を手にすることができるのだから、人々は目の色を変えてまるで何かにつかれたように採集を続ける。この結果、ブッシュにはチプミ採集のために根元から伐採されたムトンドの大木がごろごろころがることになるわけである。

この時期のブッシュは見知らぬ人々が大勢集まり、さまざまな店が出、ビールの酒宴が続き、そして時には人さらいまで出るという。これを指し

第2表 チプミと品物との交換率(1992年)

乾燥チプミ	品物
カップ(200ml)	K200
ボール1(600ml)	子供用運動靴
ガロニ0.5(エンジン オイル罐2ℓ)	ショーツ、子供用Tシャツ、 砂糖1kg
チコボ(罐)1(1.8ℓ)	K800、棒石鹼、砂糖2kg、 ベルト
ガロニ1(エンジン オイル罐4.5ℓ)	ソフィア靴、ハーフベチコート、 スカーフ、ワンピース
ガロニ1+ボール1 (5ℓ)	チチンゲ
バケツ1	ズボン、毛布、鋤

(注) K：クワチャ(1クワチャ=約4円〔1992年〕)。

第3表 チプミの当たり年と購入した品物(A家の事例)

1974	大当たり	自転車, 毛布, 服, チテンゲ, ズボン, 鍬
1978	大当たり	チテンゲ, 服, 靴
1980	当たり	チテンゲ
1990	当たり	鍬, チテンゲ, 下着
1992	当たり	ベルト, ワンピース, チテンゲ, 靴, 革靴, Tシャツ, 下着

て人々は、チプミの採集期には「ブッシュに町がやってくる」のだと表現する。

第2表には1992年時点での乾燥チプミとこうした品物の交換比率を掲げた。品物と交換するチプミを計るには、プラスチックのカップやボール、車のエンジンオイル罐などの容器が使われる。600ミリ・リットル入りのボールを山盛りにして100グラム程度、およそ200匹の乾燥チプミで子供用の運動靴が買える。昨年人気があったのはバタフライと名付けられたベルトで、大きな蝶の形をしたバックルがついている。これは3リットル罐を山盛りになると買えるので、私たちの住み込んでいる村ではほとんどの女性がこれを機にバタフライの所有者となった。この他に、マラウィ製のプラスチック靴(ソフィアとよばれる)、チテンゲ(婦人の着用する一枚布)、ハーフペチコートなどは人気定番で、ズボン、毛布、鍬などになるとよほど採集量が多かった世帯か、他のものを買うのをあきらめた世帯が購入することになる。

昨年17キログラムの乾燥チプミを採集したA家では、バタフライベルト2本、チテンゲ1枚、ワンピース1着、ハーフペチコートなど女性用下着3着、子供用Tシャツ2枚を入手した。このほか

に、12歳になる長男は母親とともにブッシュに移住して採集した分に加え、集落付近でもチプミを採集して現金に換え大切に貯めて、町まで行き、ぴかぴかの黒い革靴を買ってきた。

このようにいろいろな品物が買えるほどチプミがとれる当たり年はそう頻繁にあるわけではない。上にあげたA家で聞き取りをしたところ、近年では1974年、78年が「大当たりの年」で、80年、90年、92年は「当たり年」だったという(第3表)。他のいくつかの世帯での聞き取りからも同じような結果が得られているから信憑性は高いといっていだろう。この家では74年の大当たり年にチプミで自転車、毛布、家族全員の新しい衣服、チテンゲ、ズボン、そして鍬2本を手に入れた。

人々はいついつの年にあれとこれを買った、ブッシュでこんなことがあったなどとてもよく覚えており、その品物を目にする度にチプミ採集を話題にする。しかも、と必ず付け加えられるのは、「その年には村に帰ってからだって何か月もおいしいチプミを食べ続けられたんだよ」というくぐりでこれを語る人々の目は夢見るようである。こんな話を繰り返し語りながら、その年の採集に参加できなかった小さな子供たちはいつかは自分もブッシュにやってくる町に出会いたいと夢み、採集に参加したおとなたちはまた再びあの日々を、と情熱をかみしめる。

ベンバにとってチプミを代表とする食用イモムシ採集は、何年かに一度気まぐれに起こる大きな祭りであり、普段の生活をしていては手に入れることのできない恵みを一度に与えてくれるたまさかの機会なのである。

(すぎやま・ゆうこ/弘前大学人文学部)